

例年、春先は昼夜・日々の寒暖の差が大きく、水稻では凍霜害や高温障害といった被害の発生が予想されます。『苗半作』と苗の良否が作柄に大きく影響します。基本技術の励行、細かな管理を行い、健苗の育成に努めましょう。
また、播種・田植えの早期化（特に南部地区）、気象の温暖化等により近年胴割米の発生が多く見られますので、播種及び田植え時期を適期に行い良質米生産に努めましょう。（中野市の播種目標 4月20日～、田植目標 5月20日～6月10日、但し「風さやか」は5月15日～30日）

1. 種初めの準備

※良品生産する上で**毎年の種子更新が重要**となっています。（種子銘柄証明のためにも採種圃産種子を使用して下さい。）

『JA長野県安心基準米』として出荷するためにも種子更新、種子証明のある苗を使用することが必要となります。

- (1) 選種：自家産種子は、純度が低く充実が悪く発芽力が劣り、苗が生育不良になるため、採種圃産種子を使用して下さい。さらに充実した種子を揃えるため塩水選を行い塩水選後は良く水洗いをして下さい。

〈塩水選比重〉 うち 1.13（水18ℓに対し塩3.6kg）

もち 1.08（水18ℓに対し塩2.3kg）

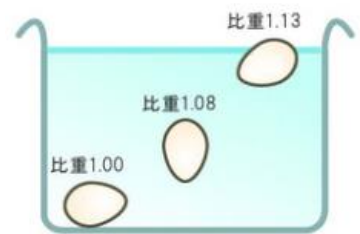


図1) 生卵による比重判断

- (2) 種子消毒 「**残液は魚毒性が強いので直接河川や用水等に絶対流さない**」

対象病害	薬剤名(使用回数)	濃 度	浸漬時間	水量 100 ℓ当り薬剤量
ばか苗病 もみ枯れ細菌病	テクリードCフロアブル(1回)	200倍	24時間	500ml

※もみ枯れ細菌病の発生が心配される場合は、カスミン液剤を播種時覆土前に4倍に希釈し1箱当たり50mlを均一に散布する。

注意事項

1. 種籾1kgに対し薬液1.7～2ℓで処理する。
2. 浸漬中は、時々攪拌し液温10℃以上とする。テクリードCフロアブルは消毒後そのまま浸種可能。すぐに浸種しない場合は陰干しし、乾かしてから浸種する。
3. 薬液は、通常3回位繰り返し使用できますので経費節減可能ですが、その場合不足した薬液は必ず補充して下さい。
4. 薬液必要量 テクリードCフロアブル(100ml) ※200倍希釈で使用する場合、1本で種籾10～12kg分を消毒できる。
5. みのる式の場合は根上がり対策として浸種直前の種子消毒とし風乾は避け、種子消毒後はそのまま浸種をする。

- (3) 浸種 「水温は5～15℃」

浸漬積算温度は100℃を目標に浸漬水温10℃で10日間程度十分に行う。

浸種水温が5℃以下だと発芽がバラつき、20℃以上ではばか苗病の発生が助長される。

浸種の水量は種子の2倍以上とし種子の位置は時々上下の入れ替えを行う。浸種期間中は3日目から1～2日ごとに新しい水に変えること。また、池を利用する場合は停滞水で行うこと。

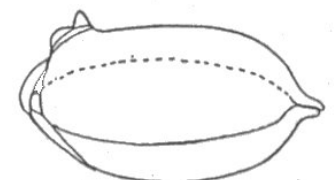
標準以上の高温管理は、ばか苗病の発生を助長するので避ける。

鳩胸状態（芽長1mm）

- (4) 催芽 「32℃以上でもみ枯れ細菌病のリスク急激に増大」

浸種後、28℃のぬるま湯に一昼夜程度浸漬して、芽長1mm(鳩胸)程度に催芽させる。

一昼夜で催芽が揃わない時は、新しい湯に取り換えて催芽が揃うまで浸種期間を長くする。



播種に最適な催芽(ハト胸)

2. 凍害対策 次の事項を守ってください。

- (1) 苗代の畦は高くし、深水に湛水できるようにしておく。
- (2) 防風施設・温水田を必ず設け、常時満水にしておく。また、降霜の恐れのある時は苗代へ湛水する。
- (3) こも等の保温資材をかけて床内温度の低下を防ぐ。
- (4) 保温資材（着色有孔ポリ及びパオパオ）をはずした後の苗代では、寒い夜は夕方から深水に少しずつかけ流しておく。また、苗代及び温水田の畦畔からの漏水に注意する。
- (5) 折衷方式のビニールトンネルでは、夕方から箱上湛水をして保温につとめ翌日排水する。もし凍霜害の被害を受けた場合は
- (6) 葉先が枯れた程度の場合は、日中浅水、夜間は深水にして回復をはかる。
- (7) 被害程度がひどくても生長点が凍害を受けていない場合には、苗箱1箱当り硫安5g程度の追肥をし、生育の促進を図る。

水稻中苗機械田植栽培方針

機械により多少育苗方法が異なるので、およそ次の事項を標準として下さい。

1. 苗代面積 10アール当り8～10㎡必要

2. 苗箱の必要量

3.3㎡(1坪)当り栽植株数	60株	65株	70株	75株	備考
10アール当り苗箱数	15～20	17～22	18～24	19～25	1箱当り100gは種
株間目安	約18cm	17cm	約16cm	約15cm	1株3～4本植え

3. 箱土と施肥

種類	1箱当り培土量	苗代1号施肥量		①播種より7～10日前に肥料を施し攪拌する(肥料入培土は不要) ②床土はPH4.5～5.0の壤土を5ミ目フルイでふるい使用する。砂土・粘土はさける。前年に除草剤を使用した土を使用しない。(培土には覆土1%を含む) ③苗立枯病防除のため1箱当たりタチガレースM粉剤をみのる式は3～4g、有底箱は8g混和する。(播種5日前からは種時)培土には含まれていません ④みのる式の伏床肥料は表層施肥とする。 ⑤覆土が薄いとみ枯れ細菌病を助長するので、粃が十分に隠れるまで行う。
		1箱当り	伏床1㎡当り	
みのる式	2%	0～10g	150～170g	
有底箱	5%	30～35g		

4. 播種量

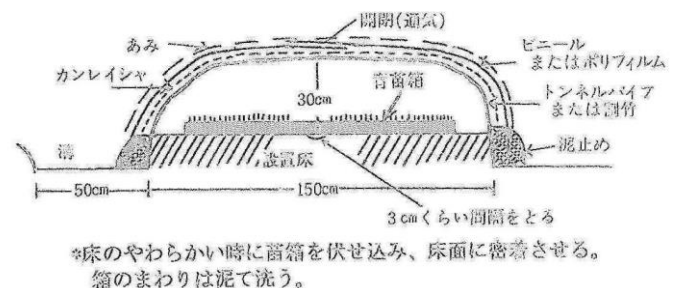
種類	1箱当り播種量	注意事項
みのる式	100g(乾粃換算80g)	催芽粃(鳩胸程度)を均一に播き、有底箱は覆土後十分かん水する。
有底箱	100～120g(乾粃換算80～100g)	

5. 床作り

- 代かき後、床作りする。
- 床面は軟らかいほうがよいので苗箱の伏込当日に床作りをする。
- みのる式は表層2～3cmはトロトロに、その下にはやや大きめの土塊があるのが理想的。

6. 伏込み

- 伏床は、小型トンネルか中型トンネル(アスパラガス用)を使用する。
- 保温資材(温床紙代替)の着色有孔ポリ及びパオパオは高温障害防止のため出芽が確認されたら早めに外す。
- 小型トンネルの被覆用資材は、通常のビニールフィルムにかえてポリネット(天井部分寒冷紗)及びミラーシートでもよい。
ミラーシートは断熱性及び保温力があるため育苗管理しやすい資材。



7. 管理

生育期	実施事項	注意事項
(1) 発芽期	①発芽揃いを良くするために12～32℃内に床内温度を保つ。 ②水位は育苗箱の底面よりやや低めとなるよう加減する。 ③箱土が乾いた場合は、一旦箱上までかん水した後直ちに排水する。	◆発芽揃までは過湿や過乾にならないように特に留意する。 ◆発芽揃期に土がもちあがった場合は、一旦湛水するか、またはジョロでかん水して土を落とす。発芽揃までに5～6日間を要す。
(2) 1葉期～1.5葉期	①トンネル内の温度は12～25℃を目標に、昼間26℃以上の場合はトンネルを開き、夜間は保温をする。	◆床面が乾燥した場合のみ箱の上まで湛水し、後直ちに排水する。育苗初期(3葉まで)に30℃以上の高温に長時間遭遇させない。
(3) 1.5葉期～3葉期	①水位は育苗箱の底面よりやや低めとなるよう加減する。 ②温度目標12～22℃、昼間床内温度を25℃以上にしない。 ③昼間はトンネル被覆を開いて外気にならず。夜間はトンネルを閉じる。	◆1.5葉～3葉期は離乳期で、高温・低温によってムレ苗・立枯病になりやすい。また、凍霜害の恐れのある場合は、深水にしてビニールを閉じる。
(4) 3葉期	①3葉期以後は、日中天井を広く開いて健苗の育成につとめる。 ②追肥は3葉期頃、肥切れが生じた場合は1箱当り硫酸5gを水に溶かして肥切れ部分に追肥する。	◆植付4～5日前からビニール・カンレイシヤを全開して苗を外気にならず。徒長の恐れのある場合は、水位を落とすか間断かん水をする。 ◆凍霜害の恐れのある場合は深水とする。

※みのる式の場合、育苗箱の上まで滞水すると、根上がり・根渡りが助長されます。水管理に注意してください。

8. 苗代日数 本葉3.0～4.0枚、草丈15～20cmを目標に、苗代日数30～35日とする。

9. 機械移植の初期害虫防除 育苗箱施薬はいずれも1箱当り50gを施薬する。また、使用回数は1回とする。

<注意事項>

- 苗箱の上から均一に散布し、茎葉に付着した薬剤を払い落として使用する。ムレ苗、軟弱徒長苗への使用は避ける。
- パディート箱粒剤はニカメイチュウ、イネツトムシ、フタオビコヤガ(イネアオムシ)や黄萎病を媒介するツマグロヨコバイにも有効である。

	施薬1箱当り	イネミズゾウムシ	イネドロオムシ	ニカメイチュウ		イネツトムシ	フタオビコヤガ	イナゴ	ツマグロヨコバイ	葉もち病
				第1世代	第2世代					
ブーンパディート箱粒剤	50g	○	○	○	△	○	○	○	○	○
パディート箱粒剤	50g	○	○	○	△	○	○	○	○	

- ブーンパディート箱粒剤は、葉もち病、内穎褐変病、もみ枯細菌病(苗腐敗症)黄萎病を媒介するツマグロヨコバイに対して有効。
- 播種前(床土混和处理)播種時(播種後覆土前)に施用する場合は、ブーンパディート箱粒剤・パディート箱粒剤を育苗箱1箱当たり50g使用する。